

## ● 中 部

### 水 野 みか子

2月に藤原歌劇団『カルメン』（山田和樹指揮）のホセ役を歌った笛田博昭は、近年とみに注目を集めている。タイトルロールのミリヤーナ・ニコリッチとのエネルギーに満ちた対話は、東京公演、名古屋公演ともに圧倒的な迫力だった。中井亮一、笛田、岡本茂朗、伊藤貴之という四人の男声勢揃いでピアノの石山英明と実現させた7月のガラ・コンサートは、まさに名古屋男性声楽陣の充実ぶりを明らかにした。名古屋二期会の『椿姫』（9/29,30 角田鋼亮指揮、平尾力哉演出）では村島増美、岩田千里、塚本伸彦、鳴海卓、永井秀司、初鹿野剛、奥村晃平、水谷和樹ら中堅・ヴェテランが舞台を引き締めた。名古屋二期会・芸創オペラのコラボ『天国と地獄』（3/4,5 小島岳志指揮、たかべしげこ演出）とオペラ歌手集団<樹>の『タンホイザー』『アラベラ』の抜粋上演（6/25）では若手が舞台を盛り上げた。愛知県芸術文化振興事業団主催の『ばらの騎士』（10/28,29 ラルフ・ワイケルト指揮、リチャード・ジョーンズ演出）は今年一番の注目オペラであり、インパクトの強い色彩配置で、林正子や幸田浩子ら人気の歌手陣を輝かせた。

今年度は特に器楽アンサンブルで良質の演奏会が多かった。ギターの酒井康雄とピアノの伊藤仁美による「ふたりのアレンジ」は特に奥深い。トリオ・ミンストレル（vn.木野雅之、vc.小川剛一郎、pf.北住淳）の熟成された技巧の饗宴、ブラームスの室内楽全曲演奏会を敢行中のアンディアーモ（pf.桑野郁子、vn.古井麻美子、綾川智子、va.石川園恵、vc.高木俊彰、ゲストcl.箱崎由衣、sop.小林佐代子、ten.大久保亮、bar.近野賢一、pf.奥村理恵）、モンテヴェルディ生誕450年の軌跡（6/3）、ザ・ストリングス名古屋（6/26）、東海バロックプロジェクト（9/3）、寺田弦楽四重奏団（9/13）、李善銘指揮のパッハアンサンブル名古屋（10/9）、古楽アンサンブル「ムジカ・レセルヴァータ」（10/21）、トリオ・シュパンツィヒ（11/17、vn.中川さと子、vc.松崎安里子、pf.長野量雄）などが注目された。

声楽リサイタルでは、笛田博昭（3/24）、長屋弘子（4/1）、芳村喜久子（4/30）、大野憲一（6/11）、松川亜矢（6/17）、林剛一（6/17）、飯田みち代（6/27）、下垣真希（8/5）、古澤加奈子（9/1）、渡辺純子（10/7）、松下伸也（10/11）、大橋多美子（10/17）、水谷映美（10/21）、渡部純子（10/7）、萩野砂和子（10/28）、谷田育代（11/4）、佐治多美（11/10）、中島康晴（11/12）、新実真琴（11/15）らが目立った。ボーカル・アンサンブルNOIEM（8/10）では、森雅史、近野賢一、相可佐代子、大田亮子とピアノの岩淵慶子が『ポッペア』から『ナクソス島のアリアドネ』まで充実した歌唱を聞かせた。ピアノでは、山内敦子（2/26）、長野量雄（3/31）、石川馨栄子（4/1）、塚原久美子（4/5）、丹羽悦子（5/27）、上田実季（6/10）、永野美佐子（6/23）、広瀬恵子（6/30）、赤星里奈（7/2）、丸山風乃（7/26）、中岡祐子（10/1）、竹内功（10/5）、松本総一郎（10/6）、高須博（10/7）、宮澤真未子（10/15）、伊藤美江（10/24）、伊藤めぐみ（11/11）、桑野郁子（11/17）、秀平雄二（11/20）、寺本みなみ（11/26）、ヴァイオリンでは江頭摩耶（2/10）、石田なをみ（10/19）、森本千絵（10/21）、小坂井聖人（11/27）、福井悠大（11/29）、大

友郁（12/19）、管楽器では磯貝充希（2/24,sax）、竹内雅一（3/11,fl）、片岡博明（3/10,11/6,12/20, fl）、所克頼（5/24,sax）らのリサイタルが目立った。

松尾葉子の愛知県芸術文化選奨文化賞受賞記念コンサート（7/6）は、セントラル愛知交響楽団と合唱団「かきつばた」を率いてアットホームな雰囲気だった。名古屋音楽ペンクラブ賞受賞者による6回目の企画コンサート「音環VI」（9/28）には、過去の受賞者のうち、メゾソプラノの相可佐代子、ヴァイオリンの澤田幸江、そしてピアノの北住淳、宮田俊雄、長野量雄が登場し、ズッシリ手応えのあるガラコンサートとなった。

名古屋フィルハーモニー交響楽団の定演の中では、50周年記念演奏シリーズの小泉和裕によるブルックナーの第8番（3/17）、メキシコ音楽を取り上げたアロンドラ・デ・ラ・パアラ指揮の回（7/21,22）、マーティン・ブランピンズが来日できなかったので急遽井上道義がシュニテケの作品他を指揮した回（9/8,9 委嘱作品である藤倉大の新作は演奏されなかった）、小泉が快走した『カルミナ・ブラーナ』（10/6,7）、エドウィン・アウトウォーターが第2代レジデントコンポーザー酒井健治の委嘱作品を初演した回（11/17,18）などが目立った。しらかわシリーズvol.28（2/10）では、ライナー・ホーネックの暖かみあふれる演奏に喝采が沸いた。セントラル愛知交響楽団では、レオシュ・スワロフスキーがドヴォルザークの三曲——序曲『オセロ』、ヴァイオリン協奏曲（独奏はフランシスコ・ガルシア）、『新世界』——を取り上げた第156回定期（7/28）が強烈な印象を残した。秋山和慶が芸術監督・首席指揮者となった中部フィルハーモニー交響楽団は、横山幸雄とのショパンの協奏曲第二番やストラヴィンスキー『火の鳥』で沸かせた第54回定期（2/5）やブラームス・ツィクルス（6/17,9/30）のほか大友直人とピアノの内匠慧を迎えた名曲コンサート（11/23）を実施。平成28年度名古屋市芸術奨励賞を受賞した愛知室内オーケストラは、常任指揮の新田ユリがニルス・ゲーゼを取り上げてベートーヴェンと並べたプログラムで注目された（3/17）。

作曲の伊藤美由紀がリードするニンフェアールの「トリスタン・ミュライユ70歳記念公演」（10/1）ではオンド・マルトノの原田節、市橋若菜、ピアノの内本久美が共演。三輪眞弘のモノローグ・オペラ『新しい時代』は、演出前田真二郎、主演さかいれいしうという17年前と同じ組み合わせで再演された。（12/8,9）。額田大志の『それからの街』は愛知県芸術劇場の戯曲賞受賞作として上演されたが（10/21-23）、構成や声の扱いの点から、音楽にも聞こえる。三輪の『新しい時代』と近いサウンドの場にあるかもしれない。野村誠、池田萌、牛島安希子、野口桃江、山田亮が一堂に会した「エンリコと名古屋の作曲家——実験的な音楽の夜」（9/13）や牛島の企画による「みなとの永い夜」（12/9）など、現代音楽の企画も目立った。日本室内楽アカデミーによる「夜会コンサート」（1/30）や静岡音楽館AOIの「1940年—リヒャルト・シュトラウスの家」の講演会とコンサート（佐々木典子、妻屋秀和、中川俊郎、花岡詠二ほか）（4/29）も好企画だった。